

関係におけるアイデアの分有*

久保 徹

この章の論述は、著者自身によってこれまで何度か部分的には論じられてきた事柄の集成として、あらためて『パルメニデス』第一部のテキストの全体について、個々の議論の分析とその意義の検討を順を追って総観的にまとめたものである。「はじめに」に掲げられた「テキストそのものが何を語っているかを逐一、入念細心に見定めていく」という方針に違わぬ、テキストの緻密な読解と周到な論証を重ねることによって、テキストの緊密な議論構造を明らかにし、プラトン後期における『テアイテトス』を皮切りとする新たな展開に対する著者独自の卓抜な展望への見通しを与える力強い出発点となっている。

論旨の大筋について、異論を差し挟む余地はない。あえてその方針に倣ってテキストの細部を穿ち、ささやかな疑問を提起することで、著者の主張をより明確に理解すべく、その余白にわずかばかりの（できれば有意義な）補助線を引くことを願うのみである。

なお、提題の趣旨を明確にするために、本書の論述順序を離れていくつかの論点を関連づけながら提示してゆきたい。そのためにかえって読み手を煩わすことになることを予めお宥し願いたい。

1 二世界説（第六尋問）—— われわれとアイデア

まずはじめに『パルメニデス』133c9-d2のテキストの解釈を取り上げる。

Fujisawa 1974 以来、藤澤はこの箇所ので $\mu\epsilon\tau\acute{\epsilon}\chi\epsilon\iota\nu$ (d2) を変則的な用法（むしろプラトンによる意図的な誤用）と解し、134b3-12 および c10-d2 と合わせて分有と所有 ($\acute{\epsilon}\chi\epsilon\iota\nu$) の混同に、困難がもたらされる一つの要因を見て

* 本稿は、2015年3月28日、古代哲学フォーラム（イリソス会）によって催された藤澤令夫著『プラトンの認識論とコスモロジー』（岩波書店、2014年12月刊）の合評会において、提題者の一人として、Ⅲ章「最大の反省事項としてのアイデア論——『パルメニデス』で何が行なわれたのか」に対するコメントとして発表した原稿に若干の補筆・修正を加えたものである。質疑に際し貴重なご指摘をいただいた諸氏に感謝申し上げます。

いた⁽¹⁾。

本書でもこの箇所テキスト解釈は踏襲されている (pp.101-102)。藤澤による訳文と、それに対する解説は次の通り。

「われわれの世界にある (アイデアの) 似像 …… つまり、それをわれわれが分有することによって、それぞれのものであると呼ばれるところの似像」

〔この一節〕が述べているのは「われわれ」とアイデア (Φ) との関係ではなく、その似像 (F) との関係であるから、本来ならば「それ (似像 F) をわれわれが分有することによって」(ὄν μετέχοντες) ではなく、「それを …… もつことによって」(ἄ ἔχοντες) と語られなければならないはずである。何人かの学者がこの「アイデアの似像を分有する」という言い方の特異さに気づいて、困難を回避するために原文の読み方をいろいろ工夫している。しかしコンテキスト全体を見て、以下に続く [134b3-12, c10-d2] に注目して合わせ考えるならば、「分有する」と「もつ」との役割分担の曖昧化という術策の一環とみなすのが自然であろう。〔いずれも強調は原文〕

文中で指摘されているように解釈の分かれるテキスト箇所だが、原文はこうだ。

… τὰ παρ' ἡμῖν εἴτε ὁμοιώματα εἴτε ὅπῃ δὴ τις αὐτὰ τίθεται, ὄν ἡμεῖς μετέχοντες εἶναι ἕκαστα ἐπονομαζόμεθα· (133c9-d2)

便宜上、別の立場からの試訳を先に示すと、

「われわれのもとにあるもの —— それらを、われわれがそれを分有することによってそれぞれのものと名づけられるところのもの (アイデア) の、似像であるにせよ、あるいは人がどのように見なすにせよ ——」

つまり争点は、ὄν (d1) の先行詞を τὰ παρ' ἡμῖν = ὁμοιώματα と解するか、ὄν 自身の内に先行詞が含まれ (sc. ἐκείνων ὄν)、属格は μετέχοντες

⁽¹⁾ Fujisawa 1974, pp.30-34; 藤澤 1980, pp.97-103 = 2000, pp.108-114.

の目的語であるとともに、ὁμοιώματαにかかっていると読むかである⁽²⁾。

後者の読み方をとるべき理由を三つあげる。

(1) ὁμοιώματα を先行詞と見なすと、ὧν 以下が ὁμοιώματα に吸収されてしまうことになり、ὁμοιώματα が何の似像なのかが宙に浮いてしまう。藤澤は訳文で「(イデアの)」とわざわざ補っている。当然 understand されるということだろう。しかし、後者のこの点でのより自然な読み方と比較すれば、やはり難がある。

(2) この文脈では、τὰ παρ' ἡμῖν と ἡμεῖς はつねに同列におかれている (cf. 133e4-5, 134d10-e6)。τὰ παρ' ἡμῖν を分有することによって ἡμεῖς がそれぞれのもの (ἕκαστα) と名づけられるという従属的な階層関係を想定する余地はない。(ἕκαστα もまた、ἡμεῖς が τὰ παρ' ἡμῖν と同一視されていることを示唆する。) 直後の τὰ δὲ παρ' ἡμῖν ταῦτα ὁμώνυμα ὄντα ἐκείνοις (d2-3) もこの見方を強く支持する。

(3) かつて藤澤が註記した⁽³⁾ 130e5-6 の、これとパラレルな表現 (εἶδη ἄττα, ὧν τάδε τὰ ἄλλα μεταλαμβάνοντα τὰς ἐπωνυμίας αὐτῶν ἴσχειν) は、たんに見かけ上のパラレルにすぎない。むしろコンテクストからは、内容的に反対のことを示唆するように思われる。この箇所をそれとは異なる構文で読むことに、文法的な困難はとくに感じられない。

この見方が正しいとすれば、少なくともこの 133c9-d2 の箇所には μετέχειν の正規の用法を逸脱した用例は認められないことになり、むしろ似像モデルによる記述を含めたイデアの分有関係の可能性がパルメニデスによって想定されていることになる。

とはいえ、その他の箇所 (134b3-12, c10-d2) における分有と所有の混同による誤用は明らかであり、藤澤の論旨はそれによっていささかも揺るがない。藤澤の言うように、分有と所有の混同が、われわれによる〈知識〉のイデアの分有という事態をわれわれの視野から遮蔽する効果をもたらしていることは確かに否定できない。

しかし、ὧν をめぐる上の解釈からも明らかなように、パルメニデスはこ

⁽²⁾ 前者の解釈をとるのは、藤澤を含め、Waddell, Diès, Taylor, Cornford, 池田, Allen, Gill ら多数。私自身も以前この立場をとっていた (2006b, p.27 n. 1)。後者の解釈に立つのは、Apelt, Cherniss 1944, pp.178-179 nn. 101, 102; 1957, p.364 n. 1, Moreau, 田中 1975; 1989 である。

⁽³⁾ Fujisawa 1974, p.32 n. 8; 藤澤 1980 = 2000, n. 9.

の箇所の議論でアイデアの分有の可能性を頭から排除しているわけではない⁽⁴⁾。巧妙な議論誘導がわれわれの視界を遮るとはいえ、〈知識〉のアイデアの分有の可能性に目を向けることはなおも可能である。では、われわれが〈知識〉のアイデアを分有する可能性を認めることによって、この困難はただちに解けるだろうか⁽⁵⁾。—— 否、おそらく問題の本質はそこにはない。

ここで問われているのは、〈知識〉のアイデアと相関関係にある〈真実〉のアイデア、もしくは個々のアイデアをわれわれが知りうるかということだ。われわれが〈知識〉のアイデアを分有する可能性によって、われわれがもろもろのアイデアを知りうる可能性は何も保証されない。仮にわれわれが〈知識〉のアイデアを分有したとしても、その分有はわれわれがわれわれのもとにある事物を知ること（134a9-b2）に関わるにすぎないかもしれない。

問題は、われわれがもろもろのアイデアと知る—知られるという相関関係をもちうるか、すなわち、われわれともろもろのアイデアとの関係において〈知識〉と〈真実〉のアイデアが分有されうるか、である。

これがここで問われている問題の本質であって⁽⁶⁾、パルメニデスの議論においてその関係を捨象するうで決定的なはたらきをしているのが、あたかもこの種の相関関係が二世界のそれぞれの領域のうちに閉じているかのような語り方であった⁽⁷⁾。そして分有用語の混乱がそのカムフラージュの効果をさらに高めた、というのが実情ではなからうか。

関係におけるアイデアの分有という観点で、以上のことを理解するうえで有

⁽⁴⁾ pace Allen, pp.172-173, 177, Gill, pp.45-48.

⁽⁵⁾ Cherniss 1944, pp.282-284 et n. 191, Cornford, p.98.

⁽⁶⁾ 久保 1998, pp.11-12; 2006b, pp.23-25. cf. Cherniss 1932, pp.136-137, Bluck 1956, pp.32-33, 35. 藤澤の記述には、この点に対する新たな論及が見られる（p.100）。しかし、アイデアがわれわれの認識との「相関関係の前提のもとに措定されたもの」であり、それが「本来存在するはずの相関関係」であるにしても、その「前提」がアイデア論の枠組みのなかで成り立つかどうか、「本来存在する」と言えるかどうか、あらためて問われているのである。すなわち、アイデア論がそれが「本来存在」し、われわれの認識がそれを志向すると「前提」する、アイデア認識のその場面に、アイデアがいかに関わるか、アイデア論がいかに適用されるべきかが、問われているのだ。

⁽⁷⁾ この点も、藤澤の記述に新たに加えられている（loc. cit.）。ただし藤澤は主人—召使との平行関係を否定することによってわれわれのアイデアの知識を救おうとするが、それでは「神の無力」（神が人間の主人たりえない）という「より恐るべき困難」（134c-e）の一つを見過ごすことにならう。久保, loc. cit. を参照。

効であるように思われる。

2 似像モデル（第五尋問）—— 似像とアイデア

ここでもまた、テキストの検討（132d9-e5）からはじめたい。
まず、テキストの原文。

Τὸ δὲ ὅμοιον τῶ ὁμοίῳ ἄρ' οὐ μεγάλη ἀνάγκη ἐνὸς τοῦ αὐτοῦ εἶδους
μετέχειν;
Ἀνάγκη.
Οὐ δ' ἂν τὰ ὅμοια μετέχοντα ὅμοια ᾗ, οὐκ ἐκεῖνο ἔσται αὐτὸ τὸ εἶδος;
Παντάπασι μὲν οὖν. (132d9-e5)

試訳を与えると、

「ところで、似ているものは似ているものとともに同じ一つのアイデアを
分有することが、大いに必然ではないかね？」

「必然です」

「しかるに、それら似ているもの同士が、何であれそれを分有すること
によって互いに似ているところのものとは、かのアイデアそれ自体である
ことになるのではないかね？」

「まったくその通りです」

藤澤のテキスト理解（p.87）との相違は、註(5)で中畑が註記する εἶδους
(e1) のテキスト校訂をめぐる扱いと、ἐκεῖνο (e3) の読み方である。

まず、εἶδους については、写本通り読んで差し支えないと思われる。
Burnet (OCT) は Jackson の提案に従ってこれを削っているが (Diès,
Taylor, Cornford, Moreau らがこれに倣う)、次のソクラテスの問いとは、「同
一のアイデア」から「かのアイデアそれ自体」へと明らかに議論のステップが推
移しており、内容的に重複しない⁽⁸⁾。

ἐκεῖνο をどう読むかは見解が分かれるだろうが、大方の訳者は、先行詞
を含む関係詞 οὗ を受け直したものと見て、「……ところの、それが（その）

⁽⁸⁾ 久保 2006a, p.53 n. 2.

アイデアそれ自体である」と読んでいる。藤澤の訳も概ねその読み方の線に沿っている。だが、このテキストの前後を見渡すと、たとえば直前の d5 に ἐκεῖνο τὸ εἶδος という表現が見えるほか、ἐκεῖνο αὐτὸ τὸ εἶδος という厚ぼったい表現にしても、τῆς ὁ ἔστιν ἀλήθεια αὐτῆς … ἐκείνης (134a4) や αὐτοῦ δεσπότης … ὁ ἔστι δεσπότης, ἐκείνου (133d8-e1) など、類例が見当たらないわけではない。

意味内容を考えても、「かのアイデアそれ自体」と読むことによってはいままさに似像との類似関係が論じられているところの当のアイデア、という意味合いが出るのではなからうか。ἐκεῖνο をこの意味に読んでいるのは、田中とおそらく Taylor, Cornford かと思われる。

したがって、テキストそのものの読み方としては、先の註(5)で中畑によって言及されている Schofield らの読み方——「(その) アイデアそれ自体」を〈類似〉のアイデアと解し、似像モデルの困難を〈類似〉のアイデアの無限背進に見る——は、やはりどう見ても無理筋だろう。ἐκεῖνο αὐτὸ τὸ εἶδος が ἐκεῖνο τὸ εἶδος (d5) とじつは別物だというような不用意な書き方は、まずプラトンはしないと思われる。

さて、Schofield らは別として、このようなテキスト解釈上の齟齬は、しかし藤澤の似像モデルをめぐる議論の論旨にさして影響するわけではない。

似像モデルの困難の原因とその解法について、藤澤は次のように明解に述べている (pp.91-92)。

〔アイデア X とその似像 Y が互いに似ているのは〕 Y がその X に似ている似像であるというそのことによる。けっしてパルメニデスの反論が言うように…… X と Y とが同じ資格で両者以外の何かを分有 (共有) することによるのではない。

……

こうして、(ii) の命題「互いに相似るものはともに同じ一つの何かを分有 (共有) している」は、ソクラテスが提案したアイデア = 原範型とそれの似像との関係にかぎっては、成立しないのである。したがって、ポイント (iii) —— 別の新たなアイデアの出現 —— もありえないから、パルメニデスの反論は無効である。

以上見てきたところをまとめると、ソクラテスの提案に対するパルメニデスの反論 (第五尋問) については、

(i) が述べる、アイデア = 原範型とそれの似像の相互類似性を肯定し

つつ、しかし

(ii) が述べる、両者（原範型とその似像）による同一のものの分有を否認し、したがってまた、

(iii) が述べる、分有（共有）される別のアイデアの存在も当然否認して、

(iv) の結論を不成立と認定する。

これが正解である。

似像ならば似ていることは必然だが、似ているからといって似像であるとは限らない。アイデアとその似像が互いに似ているのは、ただその似像がまさにそのアイデアの似像であることによる。両者が同じアイデアの、ましてや第二のそのアイデアの似像である必要はない。それゆえ、アイデアの無限背進は生じない——。

Fujisawa 1974 以来の一貫した立場であり⁽⁹⁾、アイデアと似像との相互的な類似関係についての因果的な説明として、その限りではまったく正しい。

ところで、Cornford の指摘も見逃せない。アイデアと似像が似ているとすれば、その原因は本来、「導入」でまさにソクラテスがゼノンの背理を解消する説明に用いた (129a)、〈類似〉のアイデアに求められるべきだというのだ⁽¹⁰⁾。

たしかに似像 F はアイデア Φ の似像であることによって、アイデアと似ている。そしてその限りにおいて、アイデアもまた似像に似ていると言えるであろう。因果的な説明としては、それで間違っていない。しかしまた、似像はあくまでも似像である限りにおいて、アイデアに似ているとともに、また完全には

⁽⁹⁾ Fujisawa 1974, p.50 : "[I]f there are images that are similar to one another by resemblance to a single original, this original and any one of the images are similar to each other *not* by the participation of both in one and the same thing, but just by the latter's imitating the former," (his italics) ; 藤澤 1980, pp.124-125 = 2000, p.137: 「原物とその似像とは相互に似ていると一応いえるとしても、それはしかしけっしてパルメニデスが論じるように、両者が同資格で共に同じ一つのものを分有していることによるのではなく、ただ単純に後者が前者を模した似像であるという事実による」: 1998, p.163. cf. also Cherniss 1957, pp.365-368.

⁽¹⁰⁾ Cornford, p.94. そもそも Allen が着想し (pp.159-162)、Schofield, pp.61-66 や Gill, pp.43-45 らに継承された先のようなテキスト解釈も、この Cornford の着眼がきっかけとなったと思われる。ただし Cornford は、困難の解決として〈類似〉のアイデアをもち出すのであって、テキストそのものに〈類似〉のアイデアをめぐる困難を読み取るのではない。

似ていない（劣っている）存在でもあるのだ（『パイドン』74d-75b）。そしてアイデアもまたこれに応じて、似像と似ていてかつ完全には似ていないことになる。むろんこの点についても、因果的説明は可能である。似像はアイデアに完全には似ていないから、両者は互いに似ていて、かつ似ていないのだ、と。だが、この事態についてアイデア原因説の立場から説明を与えるとすれば、どうなるか。アイデアとその似像とは〈類似〉のアイデアを分有することによって互いに似ており、また〈不類似〉のアイデアを分有することによって似ていない、ということになる（¹¹¹）。

そこにはある種の循環が感じられるかもしれない。〈類似〉のアイデアを分有する（その似像となる）こと自体が、すでに〈類似〉のアイデアの分有を必要とすることになるのではないかと。しかし、類似という事態がもたらされる過程の説明ではなく、すでに成立したその事態についての原因説明である限りにおいて、循環はない。また、両者が〈類似〉のアイデアに似ているという事態についてさらに問われるならば、両者と〈類似〉のアイデアとの関係において〈類似〉のアイデアが自己原因として再帰的にはたらいっている——分有されている（その似像が生じている）——ことによる、とその都度答えればよい。

つまり、パルメニデスの問いに対しては、「同一のアイデア」は〈類似〉のアイデアであって、「かのアイデアそれ自体」ではない、だから無限背進は生じない、と答えることがひとまず可能である。

だが、おそらく Cornford は気づいてまいが、アイデアの分有によるこのような原因説明は、従来のアイデア論の枠組みを逸脱するものである。アイデアΦとその似像Fとの、Fという性質に関わる分有関係以外の関係（ここでは類似関係）における（〈類似〉の）アイデアの分有を語るものであるからだ（¹¹²）。

以上の考察が無意味でないとすれば、この意味で、似像モデルの困難は、先の二世界説の困難と通底している。そこでもまた、われわれとアイデアとの

¹¹¹ 「アイデアの存在範囲」（第一尋問）において (iii) 髪、泥、汚物など不定形、不完全なもののアイデア（＝完全な原範型）の存在が問われたことと関連するかもしれないが、〈類似〉といった「不完全な」（たとえば〈等〉や〈同〉に比して）性質のアイデアがなぜここで導入されたのか、とりわけ〈不類似〉のアイデアがなぜ必要なのか釈然としなかったが、このような説明のためにはやはり必要と認めざるをえないであろう。プラトンはむろん、初手からすべてを見越していた。問題をこじれさせかねないことは承知で、それを克服できるという見通しをもって〈類似〉のアイデアを導入したのであろう。

¹¹² 久保 1998, p.11; 2006a, p.59.

知る－知られるという、分有関係以外の関係におけるアイデアの分有が問題とされている（問題の背後にある）と考えられるからだ。

3 アイデア相互の結合関係（導入・エピローグ）—— アイデア相互

ここで、いったん別の論点に目を向けよう。

「導入」においてソクラテスは、ゼノンの背理を〈類似〉〈不類似〉のアイデアによって当然のこととして解いたあとで、これと対比して「驚嘆すべきこと」としてアイデアそのものがそれ自身と反対の性質をもったり、もろもろのアイデアが相互に混合したり分離したりする可能性について否定的に言及する(129b-130a)。藤澤の記述は (pp.109-110)、『パイドン』のアイデア論の立場を引きながら —— アイデアのみならず内在性質もそうだとするのが藤澤のここでの論点ではあるにしても —— アイデアがそれ自身と反対の性質をもつことなどありえないことであるかのように、いやに素っ気ない⁽¹³⁾。この一節は、くどいほど長々と（あまり長いので引用を控えるが）手を替え品を替え、ソクラテスが上のような趣旨のことを言い立てて、しまいにはアイデアの結合関係の話までがもち出されるという場面であり、いかにも語るに落ちたという印象を与える書き方がされている。おそらくこれは、ソクラテスにそれとは知らずに語らせているプラトンの演出であり挑発であって、第二部で展開されるはずの一連の論証も、やがて『ソピステス』でのメギスタ・ゲネーの結合関係をめぐる考察 (251d 以下) も、ここでの伏線に対する応答であることは比較の見易い事実であろう⁽¹⁴⁾。

それらの議論でアイデア論の新たな展開にとって重要な役割をはたすのが、関係におけるアイデアの分有という観点である。

『ソピステス』から一例を引くと、〈動〉は、それ自身との関係において〈同〉を分有して同であり、〈異〉の関与によって〈同〉と同じではない（〈同〉との関係において〈異〉を分有して異である）(256ab)。したがってまた当然、〈同〉は〈動〉と異なり、〈異〉はそれ自身と同じであることになろう（反対の性質の成立）。

総じて本書では、『ソピステス』の扱いが希薄であり、ギガントマキアー

⁽¹³⁾ Allen など、明確にそう主張する論者もいる (pp.87-91)。

⁽¹⁴⁾ 久保 1998, p.13; 1999, pp.72-73; 2006b, p.26.

は別として、メギスタ・ゲネーの結合関係の議論への論及は、わずかに「(分有用語の転用例として) イデア相互の結合関係」(p.107)、「後半部に見られる言語論的考察」(259d 以下のシュンプロケー・エイドーンの議論を指すか) (p.252) などにとどまる。

『ソピステス』にすぐれた訳業のある藤澤がこの論点に積極的に触れようとししないのは、不可解である。論旨の大筋から外れるという理由でおそらくひと思いに切り捨てたのであろう⁽¹⁵⁾。

しかし、メギスタ・ゲネーの結合関係をめぐる考察は、ギガントマキアーの議論で論じられる実在をめぐる存在論的考察ともけっして無関係ではない。メギスタ・ゲネーの結合関係の検討に取りかかるにあたって、エレアの客人はそれがギガントマキアーの議論と関わるものであることを周到に注意している (251d)⁽¹⁶⁾。

そして『パルメニデス』第二部の狙いの一つも、何よりこの考察に習熟するための準備にあった。すなわち、「エピローグ」でパルメニデスからソクラテスに課される「訓練」(γυμνασία) とは、

言論によってとらえられうるもろもろのイデアについて、(135e2-4)

そのそれぞれがあるという前提から、またあらぬという前提から、(135e8-136a2)

それ自身との関係において、また他のものとの関係において、何が帰結するかを考察する (136a4-c5)

という趣旨のものであった。そこで展開される一連の論証には、まさに関係におけるイデアの分有という観点がしばしば用いられることになる (143b3-6, 161a6, 161b5-6, 162a6-b3, 164a2-4)⁽¹⁷⁾。

藤澤は第二部の「骨の折れる遊戯に興じる」(πραγματειώδη παιδίαν παίζειν, 137b2) ことは避けて、プラトンによって課された「課題」を見定めることに専念し (p.106)、本書が主題とするその「課題」(pp.111-112) を追求することに思考を収斂させてゆく。むろんそのことに異存はない。

だが、イデア論が上のような方向での理論的な整備・発展を目指そうとし

⁽¹⁵⁾ 藤澤令夫『ソピステス』〔岩波版プラトン全集〕「解説」, pp.413-416 を参照されたい。

⁽¹⁶⁾ 久保 2012 にこの点をめぐる考察の試みがある。

⁽¹⁷⁾ 久保 1998, pp.8-9, 14-15; 1999, pp.71-72 et n. 20.

ていることもまた同時に疑いようのない事実だと思われる。おそらくプラトンはここでも二正面作戦をとってしよう。二世界説の困難を提示するにあたってパルメニデスは、困難の解決のためには「きわめて多くの事柄を速くから骨を折って論じ」(πάνυ πολλά καὶ πόρρωθεν πραγματευομένου, 133b8-9) ねばならないことを予め断つておいた。「役に立たないと思われ、世人から空理空論(ἀδολεσχία)と呼ばれるものを通じて」(135d4-5) 訓練を積むこともまた、「若いソクラテス」(未成熟なアイデア論)にはけっして疎かにされてはならないことであった。

4 『パイドン』シミアスとソクラテス(総括)——事物相互

「分有をめぐる部分/全体のディレンマ」(第二尋問)の劈頭、パルメニデスはあらためてソクラテスのアイデア原因説の立場を確認する(130e-131a)。『パイドン』102bの記述と類比される表現(Cornford)によって、『パイドン』のアイデア原因説(100b-102b)がここで議論に正式に導入される。

藤澤は、分有用語の用例が意外に少なく、『パイドン』のこの箇所と『饗宴』211b、『国家』第五卷 476dときわめて限られている点を強調する(pp.107, 112, 279)。だが、そのいずれもがアイデア原因説の提示をはじめとする重要な場面で用いられていることは、十分に考慮されねばならない。『国家』の用例は、直前の似像用語(476c)とともに併用されており、その点でも興味深い。何より475e以下でアイデア論がこの対話篇のなかではじめて述べられる箇所であるし、『饗宴』の〈美〉のアイデアの記述(おそらくプラトンのアイデア論への最初の言及)における用例にしても、アイデア原因説の文脈でとらえることができるものである。

藤澤はまた、『パルメニデス』129cdでも『パイドン』102b-dでもアイデア原因が実際の説明において用いられていないと指摘するが(pp.108-110)、けっしてそうではない。

前者でソクラテスが「一でありかつ多である」のは、それぞれの観点において〈多〉を分有するとともに(129c8)、〈一〉を分有するからだ(d1-2)と明確に語られている。

また後者において、たとえば、シミアスがソクラテスより大きいという事態は、次のように説明される。

「シミアスはその本性によって——シミアスであることによって——

(ソクラテスを) 凌駕しているわけではなく、たまたま彼がもっている大のおかげで凌駕しているのだから。他方また、彼がソクラテスを凌駕するというのも、それはソクラテスがまさにソクラテスであるからそういうことが起こるのではなく、ソクラテスがシミアスのもつ大に対して、小をもつからにほかならない」(102c1-4) ⁽¹⁸⁾

これはたんに二つの性質F (大) とG (小) が関係項を切り替える観点の指定によって説明されている (p.109) というようなことではない。当然この議論には、直前に表明されたアイデア原因説の考え方 (100e-101b) が適用されているものと考えねばならない。

「大きいものを大きくあらしめているもの、より大きいものをより大きくあらしめているものは、〈大〉にほかならないわけだね。また、より小さいものは〈小〉によって、より小さくあるのだね」(100e5-6)

「すべて他と比べてより大きいものは、ひとえに〈大〉によってより大きいのであり、ほかならぬこの〈大〉こそが、より大きくあることの原因である。またより小さいものは、ただ〈小〉によってより小さいのであり、ほかならぬこの〈小〉こそが、より小さくあることの原因なのだ」(101a2-5)

アイデア原因による説明はたしかに表面にこそ表れないが、背景に隠れているだけで、説明の背後で潜在的にはたらいっている。関係におけるアイデアの分有という観点から、先ほどのシミアスとソクラテスの事例について詳しく述べるとすれば、

シミアスはソクラテスとの関係において〈大〉のアイデアを分有することによって大であり、ソクラテスはシミアスとの関係において〈小〉のアイデアを分有することによって小である。

すなわち、シミアスとソクラテスの相互の関係において、一方には〈大〉、他方には〈小〉のアイデアが分有されて、それぞれより大、より小となる。

⁽¹⁸⁾ 以下、『パイドン』からの引用は藤澤訳に準拠、一部表現を改めた。

102c は、その簡明素朴な表現にすぎない。関係におけるアイデアの分有という定式が、もし『パイドン』のこの時点ですでに明確にあったとすれば、上のように言い表されることもできたであろう。

おそらく藤澤はそれでも、分有用語の記述方式をとるかぎり、自然学的・因果的な説明に直通せざるをえない、と決めつけるであろうか (pp.149-150)。

分有用語に対する藤澤の批判もしくは反省的自覚は、以前にもまして痛烈である (pp.107-108, 110-111)。たしかに、 x の消去というモチーフに関する限りは、それを認めざるをえない。 Φ を「分有する」にせよ、 F を「もつ」にせよ、主語 x の存在を前提する羽目になることはどうしても避けられないであろう。

しかし、分有用語がアイデア Φ と性質 F の混同をもたらすという点については、はたしてどうであろうか (p.108)。『パイドン』のアイデア原因説の叙述においても、プラトンはつねに両者を明確に区別して書き分けており、アイデア Φ と性質 F の混同に関しては、アイデア論そのものに非があるとは私には思えない。非は明らかに読む方の側にある (pp.76-79)。

たとえば、『パルメニデス』ではアイデア論の導入にあたって (130b)、(i) アイデア Φ 、(ii) 性質 F 、(iii) 個々の事物・事象 x の三項が区分されたと藤澤は述べるが (p.61)、実際にはパルメニデスはたんに並列的に三分類しているわけではなく、きわめて注意深く、アイデア Φ と事物 x 、アイデア Φ と内在性質 F をそれぞれ対比し、アイデアがそれらいずれからも離在することの確認を行なっているのである⁽¹⁹⁾。つまり、藤澤の警戒とは裏腹に、この箇所では、 Φ と F を類同化し、両者を x と対比する誤った区分理解に対して、少なくともアイデア論の側からはあらかじめ最大限の予防線が張られているのである。

『パイドン』についても事情は同様である。 F はつねに x の内在性質として、それらから離在するアイデア Φ とは対比されて、 x の側に位置づけられ、アイデア Φ と $F \cdot x$ との間に一貫して明確な区分がおかれている。なるほど、内在性質 F は自らと反対の性質をもたない限りにおいて、あたかもアイデアに近似するようにも見える。しかしそれは、あくまでそれが F である限りにおいて とされるのであって、「ありかつあらぬ」(Φ に似ているが劣っている) F の素性を、単純にアイデア Φ の「まさに F である」あり方と同一視することは許されない。アイデア Φ と内在性質 F とは、あくまで一方は実在のうちにあるも

⁽¹⁹⁾ テクストを注意深く読めば、この点がさらに c1-2, d1-2 でも繰り返し強調されていることに気づかれよう。

の、他方はわれわれの内にあるものとして、厳しく分かたれるのである (102d, 103b) ⁽²⁰⁾。

5 『テアイテトス』の知覚論 —— 知覚主体と対象

最後に『テアイテトス』の知覚論 (IV章) について一瞥する。

『テアイテトス』の知覚論が、われわれの知覚についてのプラトンの最終的な説明であるとすれば、(藤澤の論旨には反するにしても) アイデア原因説をそこに重ね合わせることもおそらくは可能であろう。試みに、知覚主体と対象との関係に、関係におけるアイデアの分有という観点を適用すれば、こうなる。

二つの動が出会い、一方が働きかける動、他方が働きかけられる動となると、働きかける動と働きかけられる動との関係において、「知覚」(視覚)と「知覚されるもの」(白さ)とが、双生児の、より速い動として生み出され、一方の動(目)は、〈見る〉のアイデアを分有することによって、(視覚に充たされて)「見ている目」(仮にここでの知覚主体としておく)となり、他方の動(木切れや石)は、〈白〉のアイデアを分有することによって、(白さに充たされて)「白い」(対象)となる。

性質F-G(見ている-白い)は、アイデアΦ-Γのそれぞれの似像として同定され、その呼称が一定の意味をもって確保される (pp.226, 231, 261)。そしてそのFおよびGの意味の一定性を支えるのは、アイデアΦとΓである。そこから知識の成立に向けて、「Fであること」が内包する〈意味〉と〈価値〉につながるあらゆる連関と広がりを考慮に取りこみつつ、「ほんとうにFであるかどうか」「そもそもFであることとは何か」を次つぎとたゆみなく問い求めて、その追求はどこまでも伸び広がっていこう。(p.262)。

⁽²⁰⁾ 論者によって読み方の大きく分かれるこの箇所のテキスト全体 (102b-107a) のアイデアと内在性質の訳し分けについては、Hackforth が概ね正しいと思われる。103b6, b8 に関して藤澤は後に判断を保留したが (藤澤 1980 = 2000, nn. 4, 5, 42)、Fujisawa 1974, nn. 4, 5 の当初の所見が正しい。また 103e3 の αὐτὸ τὸ εἶδος は、議論の文脈から「性質それ自体」と訳されるべきで、Fujisawa 1974, p.35 et n. 16 以来、誤ってとらえられている。論旨のためにはむしろ 102b が引かれるべきであろう。

すなわち、分割と総合、アイデア相互の結合関係の考察を含む、ディアレクティケーによる知の追求の、はるかな行程、がはじまる。

文献（原著巻末の「文献表」にあげられたものは省略）

Apelt, O., *Platons Dialog Parmenides*, 1919.

Bluck, R. S., "The *Parmenides* and the "Third Man"", *Classical Quarterly* 6 (1956), 29-37.

Cherniss, H. F., "Parmenides and the *Parmenides* of Plato", *American Journal of Philology* 33 (1932), 122-138.

Diès, A., *Platon: Œuvres complètes VIII 1: Parménide*, 1923.

Gill, M. L., *Plato: Parmenides*, 1996.

Hackforth, R., *Plato's Phaedo*, 1955.

Moreau, J., *Platon: Œuvres complètes II: Parménide*, ed. par L. Robin, 1950.

Taylor, A. E., *The Parmenides of Plato*, 1934.

Waddell, W. W., *The Parmenides of Plato*, 1894.

池田美恵『パルメニデス』『プラトン著作集1』所収（勁草書房）1971.

久保 徹「プラトン『パルメニデス』におけるアイデアの分有について —— 第Ⅱ部からの考察の試み」（日本西洋古典学会 発表原稿）1998.

———「プラトン『パルメニデス』におけるアイデアの分有について —— 第Ⅱ部からの考察の試み」『西洋古典学研究』47（1999）, 63-75.

———「似像モデルのパズル —— 『パルメニデス』132c-133a」『哲学・思想論集』31（2006a）, 53-62.

———「二世界説のパズル —— 『パルメニデス』133b-134e」『筑波哲学』15（2006b）, 13-29.

———「動のアイデアと魂 —— 『ソピステス』245e-257a」『筑波哲学』20（2012）, 37-54.

田中美知太郎『パルメニデス』『プラトン全集4』所収（岩波書店）1975.

———『パルメニデス』『田中美知太郎全集 増補版』第21巻 所収（筑摩書房）1989.

（くぼ・とおる 筑波大学）